

内田魯庵

二葉亭追録



二葉亭追録



一 二葉亭が存命だったら

二葉亭が存命だったら今頃ドウしているだろうか？ と  
いう問題が或る時二葉亭を知る同士がよりあ寄合った席上の話  
題となった。二葉亭はとても革命が勃発ぼつぱつした頃まで露都  
に辛抱していなかつたらうと思ふが、仮に当時に居合わ  
したとしたら、ロマーノフ朝に味方したらう乎、革命党  
に同感したらう乎、ドツチの肩を持つたらう？ 多恨の  
詩人肌から亡朝の末路に薤露かいろうの悲歌を手向たむけたらうが、

ツアールの悲惨な運命を哀哭あいこくするには余りに深くローマノフの罪悪史を知り過ぎていた。が、同時に入露以前から二、三の露国革命党員とも交際して渠かれらの苦辛や心事に相応の理解を持っていても、双もろ手を挙げて渠らの革命の成功を祝するにはまた余りに多く渠らの陰謀史や虐殺史を知り過ぎていた。

二葉亭の頭は根が治国平天下の治者思想で叩き上げられ、一度は軍人をも志願した位だから、ヒューマニチーの福音を説きつつもなお権力の信仰を把持して、“*Might is right*”の信条を忘れなかった。貴族や富豪に虐げられ

る下層階級者に同情していても権力階級の存在は社会組織上止むを得ざるものと見<sup>みな</sup>做<sup>な</sup>し、渠らに味方しないまでも呪<sup>じゆ</sup>咀<sup>そ</sup>するほどに憎まなかつた。

二葉亭はヘルチエンやバクーニンを初め近世社会主義の思想史にほぼ通じていた。就<sup>なかんずく</sup>中ヘルチエンは晩年までも座辺から全集を離さなかつたほど反覆した。マルクスの思想をも一と通りは弁<sup>わきま</sup>えていた。が、畢<sup>ひつきよう</sup>竟は談理を好む論理遊戯から愛読したので、理解者であつたが共鳴者でなかつた。書齋の空想として興味を持つても実現出来るものともまた是非実現したいとも思つていなかつ

た。かえってこういう空想を直ちに実現しようと猛進する革命党や無政府党の無謀無考慮無経綸けいりんを馬鹿にし切っていた。露都へ行く前から露国の内政や社会の状勢については絶えず相応に研究して露国の暗流に良く通じていたが、露西亞の官民の断えざる衝突に対して当該政治家の手腕器度を称揚する事はあつても革命党に対してはトーンと同感が稀うすく、渠らは空想にばかり俘とらわれて夢遊病的に行動する駄々ツ子のようなものだから、時々は灸きゆうを据すえてやらんと取締りにならぬとまで、官憲の非違横暴を認めつつもとかくに官憲の肩を持つ看方みかたをした。



「露西亞は行詰っているが、革命党は空想ばかりで実行に掛けたらカラ成っていない。いくらヤキモキ騒いだって海千山千の老巧手だれの官僚には齒が立たない、」  
うみせんやません  
と二葉亭は常に革命党の無力を見縊みくびり切っていた。歐洲戦という意外の事件が突発したためという条、コンナに早く革命が開幕されて筋書通りに、トいうよりはむしろ筋書も何にもなくて無準備無計画で初めたのが勢いに引摺られてトントン拍子にバタバタ片附いてしまおうとは誰だって夢にだも想像しなかつたのだから、二葉亭だつてやはり、もし存生ぞんじょうだつたら地震に遭逢でつくわしたと同様、

暗黒くらやみでイキナリ頭をドヤシ付けられたように感じたるう。

が、二葉亭は革命党の無力を見縊っていても、その無思慮な軽率なヤリ口に感服しなくてもまるきり革命が起るのを洞観しないじゃなかった。「露西亞は今噴火坑上に踊ってる。幸い革命党に人物がないから太平を粧よそおつていられるが、何年か後には必ず意外の機会から全露を大混乱に陥れる時がある」とはしばしば云い云いした。「その時が日本の驥足きそくを伸ぶべき時、自分が一世一代の飛躍を試むべき時だ」と畑水練はたけすいれんの気焰きえんを良く挙げたも

んだ。

果然革命は歐洲戦を導火線として突然爆発した。が、誰も多少予想していないじゃないが余り迅雷疾風のだったから誰も面喰めんくらってしまった。その上、東京の地震の火事と同様、予想以上に大きくなったのでいよいよ面喰めんくらってしまった。日本は二葉亭の注文通りにこの機会に乗じて驢足を伸べるどころか、火の子を恐れて縮こまって手も足も出ないでいる。偶々たまたまチヨツカイを出しても火傷やけどをするだけで、動ややともすると野次馬扱いされて突飛ばされたりドヤされたりしている。これでは二葉亭が一世一

代の芝居を打とうとしても出る幕がないだろう。

だが、実をいうと二葉亭は舞台監督が出来ても舞台上で踊る柄ではなかつた。がら縦令舞台へ出る役割を振られてもいよいよとなつたら二の足を踏むだろうし、踊って見ても板へは附くまい。が、寝言ねごとにまでもこの一大事の場合を歌っていたのだから、失敗やりそこなうまでもこの有史以来の大動揺の舞台に立たして見たかつた。

ヨツフエが来た時、二葉亭が一枚会合に加わっていたらドウだったろう。あの会合は本尊が私設外務大臣で、双方が探り合いのダンマリのようなもんだつたから、結

局が百日鬘ひやくにちかざらと青隈あおくまの公卿くげ悪あくの目を剥むく睨にらみの見み得えで幕まくらとなつたので、見物人けんぶつじんはイイ氣持きぢに看み惚とれただけでよほほどな看功者みこうしやでなければドツチが上手か下手か解とらなかつた。あアあいう型かたに陥はまつた大歌舞伎おおおでは型かたの心得こころえのない素人役者すじんやくしやでは見得けんぼくを切きつて大向うおおむこをウナうらせる事ことは出来できないから、まるきり型かたや振事ふりごとの心得こころえのない二葉亭ふたばていでは舞まい台だいに飛出としても根ねツから栄はえなかつたろうが、沈しん惟敬いけいもどきの何なにとかいう男おとこがクロンボクロンボを勤こめてるよりも舞台ぶたいを引ひ緊きめたであらう。

とは思おもうものの、二葉亭ふたばていは舞台ぶたいの役やくを振ふるられて果はして

躍り出すだろ。空想はかなり大きく、談論は極めて鋭どかったが、率いざ問題にブツかろうとするとカラキシ舞台度胸がなくて、存外し啗そ咀しゅん逡じゅん巡して容易に決行出来なかつた。実行家となるには二葉亭は余りに思慮が細か過ぎた。右から左から縦から横から八方から只と見みうこう見て卵うの毛で突いたほどの隙もないまでに考え詰めてからでないとは何でも実行出来なかつた。実行家の第一資格たる向う見ずに猪突ちよとつする大胆を欠いていた。勢い躍り出すツモリでいても出遅れてしまう。機会は何度なんたび来ても出足が遅いのでイツモ機会を取逃がしてしまふ。存命して

いても二葉亭はやはりとつおいつ千思万考しつつ出遅れ  
 て、あつたら可惜多年一剣を磨した千載せんざいの好機を逸してしまおうが  
 落おちであるかも解らん。

が、それでも活いかして置きたかった。アレカラ先き当  
 分露国に滞留して革命にも遭逢し、労農政府の明暗両方  
 面をも目睹もくとしたなら、その露国観は必ず一転回して刮目かつもく  
 すべきものがあつたであろう。舞台の正面を切る役者に  
 なるならぬは問題でなくして、左とに右かく二葉亭をしてこ  
 の余りに大き過ぎて何人にも予想出来なかつた露西亞の  
 大變動に直面せしめたかつた。

## 二 二葉亭は実は旧人

二葉亭は露国文化の注入者としては先駆者であつた。プーシキンやゴンチャローフやドストエフスキーや露西亞の近代の巨星の名什めいじゆうを耽讀たんどくしたのが四十年前で、ツルゲーネフの断章を初めて日本に翻訳紹介したのが三十年前であつた。その頃は日本ばかりでなくて欧羅巴ヨーロッパですら露西亞を北欧の半開民族視していたから、露西亞の文化などは問題とならなかつた。露西亞の文学がポツ



ポツ欧羅巴の大陸語に翻訳され出したのはやはり同じ頃からで、何一つ欧羅巴に遅れを取らないものはない日本の文化事業の中でただ一つ露西亞の文学の紹介に率先（たとい縦令その後を続けるものが暫らくなかったにしろ）したというは二葉亭あつたがためであつた。

が、新らしい露西亞の文芸の研究者、精通者、紹介者としては二葉亭は実に輝いた先駆者であつたが、元來露西亞の思想なるものは極めてオーソドックスな官僚的階級差別心と頗る放縱なユートピヤ的空想とあるのみで、近代自由思想の糧とすべきものに乏しかったから、二葉

亭は芸術的に露西亞の勝れた世界的大作に負う処があつても思想的に露西亞から学ぶべき何物をも与えられなかつた。随したがつて少年時代から魏叔子や陸宣公で培つちかわれた頭は露西亞の文学の近代的氣分に触れてもその中に盛られた自由思想を容れるには余りに偏固になり過ぎていた。

二葉亭が小説家型よりは国士型であるというは生前面識があつた人は皆認める。この国士型というは維新前後から明治初期へ掛けての青年の通有であつて、二葉亭に限らず同年配のものは皆国士を理想とした。本党の床次とこなみ、

現閣の浜口、皆学校時代から国士を任じていた。当時の青年が政治に志ざしたのは皆国士を標的としたからで、坪内博士の如く初めから劇や小説を生涯の仕事とする決心で起たつたものは異数であつた。徳富蘆花が『ほととぎす』に名を成した後の或る時「我は小説家たるを恥とせず」とポーロ擬もどきに宣言したのはやはり文人としての国士的表現であつた。町人宗の開山福沢翁が富の福音を伝道しつつも士魂商才を叫んだ如く、当時の青年はコンパスや計算尺を持つ技師となつても、前垂掛まえだれけで算盤そろばんを持つつても、文芸に陶醉してペンを持つつても、国士といふ桎梏しっこく

から全く解放されたものは先ずなかった。身、欧羅巴の土を踏んで香水気分<sup>かみしも</sup>に浸ったものでも頭の中では上下を着て大小を佩<sup>さ</sup>していた。

二葉亭もやはり、夙<sup>はや</sup>くから露西亞の新らしい文芸の洗礼を受けていても頭の中では上下を着て大小を佩していた。聡明の人だから近代思想にも十分な理解を持っていたが、若い自由な思想に生きるよりはヨリ以上に国士的<sup>も</sup> 壮図の夢を見ていた。文学的天才に恵まれていながら文学に気乗りがせず、トルストイやドストエフスキーの偉大を認めつつも較<sup>や</sup>やもすれば軽侮する口気を洩<sup>も</sup>らし、文

学の尊重を認めるといふ口の下から男子畢世ひつせいの業とするに足るや否やを疑うといふ如きは皆国士の悪夢の囁語うわごとであつた。

二葉亭は児供こどもの時は陸軍大将を理想として士官学校を志願までした。不幸にして不合格となつたので、軍人を断念して外交方面へ方向を転じたが、学校が思うようにならず、その上に一家の事情が纏綿てんめんして、三方四方が塞ふさがったから仕方がなしに文学に趨はしつたので、初一念しよいちねんの国士の大望は決して衰えたのでも鈍つたのでもなかつた。語学校に教授を執つた時もタダの語学教師たるよりは露

西亜を対照としての天下国家の経綸けいりんを鼓吹したので、松  
 下村塾の吉田松陰を任じていた。それ故に同じ操觚そうこでも  
 天下の木鐸ぼくたくとしての新聞記者を希望して、官報局を雇やめ  
 た時既に新聞記者たらんとして多少の運動をもした位だ  
 から、朝日の通信員として露西亜へ上途した時は半世の  
 夙志しゆくしが初めて達せられる心地がして意気満盛、恐らくそ  
 の心事に立入って見たら新聞通信員を踏台ふみだいとして私設大  
 使を任ずる心持であつたらう。が、二葉亭の頭は活きた  
 舞台に立つには余りに繊細煩瑣はんさに過ぎていた。北京ペキンに放  
 浪して親友川島浪速の片腕となつて亜細亜の経綸を策し

た時代は恐らく一生の中の得意の絶頂であつたろうが、余りに潔癖過ぎ詩人過ぎて、さしたる衝突もないのに僚友の引留むるを振払って帰朝してしまった。川島は満洲朝の滅亡と共に雄凶蹉跎さたし、近くは直隸軍の惨敗の結果が宣統帝の尊号褫奪ちだつ宮城明渡しとなつて、時事日に非なりの感に堪えないで腕を扼やくしているだろうが、依然信州の山河に盤踞ばんきよして嵎ぐうを負うの虎の如くに恐れられておる。渠は実に当世に珍らしい三国志的人物であるが、渠と義を結んで漢の天下を復する計を立つるには二葉亭は余りに近代的思想を持ち過ぎていた。シカモ近代人とな

るにはまた余りに古風な国士的風懐があり過ぎていた。この鳥にも獣にもドツチにもなり切る事が出来ない性格の矛盾が何をするにも二葉亭のキャリアヤの障しょうがい碍となつた。

二葉亭と交際した二十年間、或る時は殆んど毎日往来した。終日あるいは夜を徹して語り明かした事もあった。が、お互いの打明けた談合の外は話題はイツデモ政治談や対外策、人生問題や社会問題に限られて滅多に文学に触れなかった。偶々文学談をしてもゴーゴリやツルゲーネフでなければ芭蕉や西行、京伝や三馬らの古人の批評



で、時文や文壇の噂には余り興味を持たなかつた。どうかすると紅葉や露伴や文壇人の噂をする事も時偶ときたまはあつたが、舞台の役者を土間や棧敷さじきから見物するような心持でいた。

『浮雲』以後は暫らく韜晦とうかいして文壇との交渉を絶ち、文壇へ乗出す初めに提携した坪内博士とすら遠ざかつていた。が、再びポツポツ翻訳を初めてから新聞雑誌記者や文壇人が頻繁に出入し初めた。二葉亭が二度の文人生活を初めたのは全く糊口ここうのためで文壇的野心が再燃したわけではなく、ドコまでもシロウトの内職の心持であつた。

本職の文壇人として、舞台あるいは幕裏のあるいは楽屋の人間として扱われるのを痛くイヤがっていた。「文壇の名士が来てはツルゲーネフのトルストイのと持掛けるにはクサクサする」と苦り切っていた。

『浮雲』を書いた時は真に血みどろの真剣勝負であった。『あいびき』や『めぐりあい』を訳した時は一刀三礼の心持で筆を執っていた。それにもかかわらず、後には若氣の過失わかげ あやまちで後悔へりくだしているといった。自分には文学的天分がないと謙下りながらもとにかくに大天才と自分自身まんごうりが認める文豪をさえ茶かすような語気があった。万更文

学の尊重を認めないどころか、現代文化における文芸の位置を十分知り抜いているくせに、頭の隅のドコかで文学を遊戯視して男子畢世の業とするに足るか否かを疑っていた。二葉亭の理智の認める処を正直にいわせれば世界における文学芸術の位置なぞは問題ではないのだが、儒教や武家の教養から文芸をちようちゆう彫虫末技視して軽侮する思想が頭の隅のドコかに粘り着へばいていて一生文人として終るを何となく物足らなく思わした。ゴーゴリやツルゲーネフの洗礼を受けても魏叔子や陸宣公できた鍛え上げた思想がイツマデも抜け切らないで、二葉亭の行くべき新ら

しい世界に眼を閉ざさした。二葉亭は近代思想の聡明な理解者であつたが、心の底から近代人になれない旧人であつたのだ。

### 三 二葉亭は長生きしても終生煩悶の人

それなら二葉亭は旧人として小説を書くに方あたつても天下国家を揮廻ふりまわしそうなもんだが、芸術となるとそうでない。二葉亭の対露問題は多年の深い研究とした夙昔しゆくせきの抱負であつたし、西伯利シベリアから満洲を放浪し、北京では中

心舞台に較<sup>や</sup>や乗出していたし、実行家としてこそさしたる手腕を示しもせず、また手腕がなかったかかも知れぬが、頭の中の経綸は決して空疎でなかった。もし小説に仮托するなら矢野龍溪や東海散士の向うを張って中里介山と人気を争うぐらいは何でもなかつたろう。二葉亭の頭と技術とを以て思う存分に筆を揮つたなら日本のデユマやユーゴーとなるのは決して困難でなかつたろう。が、芸術となると二葉亭はこの国士的性格を離れ燕趙<sup>えんちよう</sup>悲歌的傾向を忘れて、天下国家的構想には少しも興味を持たないでやはり市井情事のデリケートな心理の葛藤を題目と

している。何十年來シベリヤの空を睨にらんで悶々鬱勃うつぼつした磊塊らいかいを小説に托して洩はらそうとはしないで、家常茶飯的の平凡な人情の紛糾いぢれんに人生の一齣いちぢを探して描き出そうとしている。二葉亭の作だけを読んで人間を知らないものは恐らく世間並の小説家以上には思わないだろうし、また人間だけを知ってその作を読まないものは、二葉亭を小説家であると聞いて必ず馬琴の作のようなものを聯想せずにはいられないだろう。

こうした根本の性格矛盾が始終二葉亭の足蹟に累を成していた。最も一つ二葉亭は洞察が余り鋭ど過ぎた、とい

うよりも総すべてのものを畸形的きけいてき立体式すていしきに、あるいは彎曲的わんきよくてき  
 螺旋式らせんしきに見なければ気が済まない詩人哲学者通有の痼癖こへき  
 があつた。尤もこういう痼癖がしばしば大きな詩や哲学  
 を作り出すのであるが、二葉亭もまたこの通有癖わづらに累くるし  
 いされ、直線に屈曲を見出し平面に凹凸を捜し出して苦  
 んだり悶もんいたりした。坦々たんたん砥との如き何間幅げんはばの大通路を行  
 く時も二葉亭は木の根岩角いわかどの凸凹でこぼこした羊腸折つづらおりや、刃やいばを  
 仰向けたような山の背を縦走する危険を聯想せずにはい  
 られなかつた。日常家庭生活においても二葉亭の家庭は  
 実の親子夫婦の水不入みずいらずで、シカモ皆好人物揃ぞろいであつた

から面倒臭いイザコザが起るはずはなかったが、二葉亭を中心としての一家の小競合こぜりあいは絶間たえまがなくてバンコと苦情を聴かされた。二葉亭の言分いいぶんを聞けば一々モツトモで、大抵の場合は小競合の敵手の方に非分があつたが、実は何でもない日常の些事さじをも一々解剖分析して前後表裏から考えて見なければ気が済まない二葉亭の性格が原因いんしていた。一と口にいえば二葉亭は家庭の主人公としては人情もあり思遣おもいやりも深かったが、同時に我儘わがままな気難きむずかし屋であつた。が、二葉亭のこの我儘な気難かし屋は世間普通の手前勝手や肝癩かんしやくから来るのではなくて、反



覆熟慮して考え抜いた結果の我儘であり気難かし屋であったのだ。

二葉亭は一時哲学に耽った事があつたが、その哲学の根柢は懷疑で、疑いがあるから哲学がある、疑いがなく  
て仮定の名の下に或る前提を定めて掛るなら最うドグマ  
であつて哲学でないといつていた。が、一切の前提を破  
壊してしまつたならドコまで行つても思索は極まりな  
く、結局は出口のない八幡やわたし知らずへ踏込んだと同じく、  
一つ処をドウドウ廻りめぐするより外はなくなる。それでは  
阿波の鳴門の渦に巻込まれて底へ底へと沈むようなもん

で、頭の疲れや苦痛に堪え切れなくなったので、最後に  
もうき盲亀のふぼく浮木のようとりつかに取捉まえたのが即ちヒューマニチー  
 であつた。が、根柢によこた横わつてるのが懷疑だから、動や  
 やともするとヒューマニチーはグラグラして、命の綱と  
 頼むには手たよりが頼甲斐いがなかつた。けれども大船おおふねに救い上げ  
 られたからツて安心する二葉亭ではないので、板子いたご一枚  
 でも何千噸トシ何万噸フローチング・キヤッスルの浮城フでも、浪と風との前に  
 は五十歩百歩であるように思えて終に一生を浪のうねう  
 ねに浮きつ沈みつしていた。

政治や外交や二葉亭がいわゆる男子畢世の業とするに

足ると自ら信じた仕事でも結局がやはり安住していられ  
なくなるのは北京の前轍ぜんてつに徴しても明あきらかである。最後  
のペテルスブルグ生活は到着早々病臥びようがして碌々見物も  
しなかつたらしいが、仮に健康でユルユル観光もし名士  
との往来交歓もしたとしても二葉亭は果して満足して得  
意であつたらう乎か。二葉亭は以前から露西亞を礼讚して  
いたのではなかつた。来て見れば予期以上にいよいよ幻  
滅を感じて、案外くみ与しやうしい独活うどの大木だとも思い、あ  
るいは籬たがの弛ゆるんだ桶、穴の明あいた風船玉のような民族だ  
と愛想を尽かしてしまふかも知れない。当座うちの中こそ訪

問や見物に忙がしく、夙昔の志望たる日露の問題に気焰を吐きもしようし努力もするだろうが、暫らくしたら多年の抱懐や計画や野心や宿望が総て石鹼玉すべの泡シヤボンだまのように消えてしまつて索然とするだろう。歐洲戦が初まる前までどころか、恐らく二、三年も露都に過ごしたらクサクサしてとても辛抱出来なくなるだろう。

所詮しよせん二葉亭は常に現状に満足出来ない人であつた。絶間なく跡から跡からと煩悶を製造しては手玉に取つてオモチャにする人であつた。二葉亭がかつて疑いがあるから哲学で、疑いがなくなつたら哲学でなくなるといった

通りに、悶えるのが二葉亭の存在であって、悶えがなくなったら二葉亭でなくなる。命のあらん限り悶えから悶えへと一生悶えを追って悶え抜くのが二葉亭である。『浮雲』の文三が二葉亭の性格の一部のパーソニフィケーションであるのは二葉亭自身から聴いていた。煩悶の内容こそ違え、二葉亭はあの文三と同じように疑いから疑いへ、苦みくるしから苦みへ、悶えから悶えへと絶間なく藻搔もがき通していた。これが即ち二葉亭の存在であって、長生きしたからって二葉亭の生涯には恐らく「満足」や「安心」や「解決」や「落着」は決して見出されなかつたろう。

## 四 一葉亭は失敗の英雄

二葉亭は失敗の英雄であった。小説家としては未成の巨人であった。事業家としてドレほどの手腕があったかは疑問であるが、事を侶ともにした人の憶出おもいでを綜合して見ると相当の策もあり腕もあつたらしく、万更まんざらな講釈屋ばかりでもなかつたようだ。実をいうと実務というものは台所の権助ごんすけ仕事で、馴れれば誰にも出来る。実務家が自から任ずるほどな難かしいものではない。ところが日本で

は昔から法科万能で、実務上には学者を疎<sup>うと</sup>んじ読書人を軽侮し、議論をしたり文章を書いたり読書に親<sup>したし</sup>んだりするときは働きのない低能者であるかのように軽蔑されあるいは敬遠される。二葉亭ばかりが志を得られなかったのではない。パデレフスキーも日本に生れたら大統領は魯<sup>おろ</sup>か文部の長官にだって選ばれそうもない。ダンヌンチオも日本だったら義兵を募る事も軍資を作る事も決して出来なかつたらう。西洋では詩人や小説家の國務大臣や商売人は一向珍らしくないが、日本では詩人や小説家では頭から対<sup>あいて</sup>手にされないので、國務大臣は魯か代議士に

だって選出される事は覚束おぼつかない。こういう国に二葉亭の生れたのは不運だった。

小説家としても『浮雲』は時勢に先んじ過ぎていた。

相当に売れもし評判にもなったが半ばは合著の名を仮した春はる廼の舎やの声望よに由るので、二葉亭としては余りありがたくもなかった。数ある批評のどれもが感服しないのはなかつたが、ドレもこれも窮所はずを外れて自分の思う坪に陥ったのが一つもなかつたのは褒められても淋しかつた。『其面影』や『平凡』は苦辛したといつても二葉亭としては米銭の方便であつて真剣でなかつた。褒められ



ても貶けなされても余り深く関心しなかつたろうし、自ら任  
ずるほどの作とも思っていないかつた。

正直にいったら『浮雲』も『其面影』も『平凡』も皆  
未完成の出来損できそこないである。あの三作で文人としての名  
を残すのは仮令たとひ文人たるを屑いさぎよしとしなくてもまた遺憾  
であつたろう。

結局二葉亭は日本には余り早く生れ過ぎた。もし欧羅  
巴だつたら小説家としても相応に優遇され、二葉亭もま  
た文人たるを甘んずる事が出来たであらう。

(大正十四年一月『女性』一部登載)



日本文学電子図書館

---

二葉亭追録

著 者：内田魯庵

制作者：宮澤一郎

底 本：「新編 思い出す人々」  
岩波文庫、岩波書店

1994年2月16日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館